

ガビン先生と
楽しく学ぼう
古典文学講座

「古典文学から

見える昔の生活

十時〜十一時三十分



へその田〜

仲藤雅敏

令和四年十一月十八日(金)

十時〜十一時三十分

枚原市総合市民センターにて

月日は百代の過ぎゆくやうに過ぎゆく

又旅人も舟の波も漕ぎついでに過ぎゆく

とらして老をともふる花はりて旅のしるし

旅を極むる人々の多くは旅に死を覚悟する

とらして老をともふる花はりて旅のしるし

て漂泊のやうにふるまふ旅人よき旅人

またきの世は上の世なりと世のたふさ

とらして老をともふる花はりて旅のしるし

ふ川の源にありて神のたもとにけり

ふかやうにせぬ親社のまはりのまはりにあまの

くまのまはりに引のたをまはりまはりのたをまは

に里のまはりにありねたの月をまはりにありて

はるのまはりにありてはるのまはりにありて

まはりにありてはるのまはりにありて

西の向をたのむるまはりにありて

月日は百代の過客にして

月日は永遠の旅人のようなものであつて

行かふ年も又旅人也。

行く年・来る年も
また旅人のようなものである。

舟の上に生涯をうかべ

(人間の場合はたまには)
舟の上を過ぎながら一生を過す生涯や

馬の口とらえて

馬の口を取りながら

老をむかふる物は

年をひいていゝ馬方は

日々旅にして旅を栖とす。

一日一日の生活が旅であり
その旅を自分のすまひとしてゐるような
ものである

古人も多く旅に死せるあり。

(困難の道にあつて)
多くの古人が旅の途中で生涯を
終つてゐる

予もいづれの年よりか

私もいつのまにかいつの頃か

片雲の風にまよはれて

ちぎれ雲を飛ばす
長まへたな風に旅心をまよわれて

漂泊の思ひこやまず

漂泊の思ひを押さへることが
できなうな

海濱にまよふ入

そんなわけを
海濱にまよつてまよふの夢見たあけく

去年の秋江上の破屋に

去年の秋隅田川のほとりのぼろ家は
もどろ

蜘蛛の古巣をばらむて

クモの古巣をばらむて
(久方ぶりに落着き着いたの挨拶)

ゆゑ年も暮春暮る霞の空に

年が暮るに新年を迎える冬
春がすめのたひなく空を眺めながら

白川の閑こえんと

今年白川の閑を越えたのも
(落着き着かなくなり)

そぞろ神の物につきて心をくるはせ

そぞろ神にとりつか

道祖神のまねきにあひて

道祖神の招きに心を動かされて

取もの手につかず

何事にも手がつかない

もよりの破をつぶり空の緒かえて

そして
ももひきの破れをつくるは
空の緒を付け替えて

三里に久火すゆるより

三里の久火をすえるに

松島の月先心にかかりて

松島の月はどんなだろうと
とてかかる

住る方は人に譲り

そこで世は譲り人に譲り

杉田が別墅に移るに

杉田の別宅に移った

草の戸ち住替る代ぞひなの家

粗末な草庵も住む人が替われば
おひなさまなど飾ってもらえるだろう

面八句を柱に懸道

この句を面八句にして表八句を飾り
庵の柱に懸けて懸別の記念とした

百代 長い年月 永遠に

過客 行き来する人 舟を過ぐる人

ひゃくだい
はくたい
かか
かか
かか

中国の詩人 李白

「天地は万物の逆旅にして

光陰は百代の過客なり」

「天地はあらゆるものを泊める宿屋であり
時の流れは永遠の旅人である」

人生を旅にたとえた

東北地方は知らぬ世界

「あまのこ」した冒険旅行

命がなくなるかもしれない

強い心構えが必要

出だれ子定日

伊賀良日記

「三月廿日、同出、深川出船」

実際には1689元禄2二月廿七日(5/9/16)

「己ノ下廻、千住ニ揚ル」

「廿日夜、カスガヘニ泊ル」

江戸ヨリ九里余」

風雅の道(宴)

現実の自然に直面

自然と一体化

世蕉の俳諧

もう一つの自然

足 止りてはたす

住むべき家かな

妻子が家族かな

財もなし

永遠に及ぶ風雅の道

馬舟
✓旅

海濱にさすらへ

笈の小文

1709 宝永六 乙州刊行(寛政後)

道平の日記集

卯辰旅行」とも

去年秋

更級旅行

1694 元禄七 終巻

1684 貞享元 八月 野ざらへ旅行 1685 貞享二 四月末

1688 元禄十一 刊行

草枕 芭蕉公翁道の記 田子吟行

43句

江戸ー東海道ー伊勢上野ー名古屋 奈良京都ー江戸

1687 貞享四 八月 曾 鹿島紀行

鹿島詣

7句

江戸ー松戸ー鹿島 潮来ー江戸

1687 貞享四 十月 五日 笈の小文 1688 貞享五 四月 二十三日

卯辰旅行 ともに越智越人(尾張藩門)

53句

江戸、東海道ー熱田宿屋ー伊豆湖岬ー熱田 名古屋ー伊豆三野へ帰郷ー又の三十三回忌 ともに坪井杜因(名古屋)

三野の春 笈の端下奈良大阪御鷹ー京都
八付録

1688 貞享五 八月 十日 更級旅行

8月 15 名月

11句

岐阜ー馬籠ー妻籠ー寝覚の床ー更級 狭持山ー善光寺ー碓氷峠ー江戸 八月下旬

1689 元禄二 三月 二十七日 おくのぼろ道 同年 八月 二十日 大垣入り

九月 十六日 まで

50句

自分にヒキヒキ 日記改め旅り 元禄七 1694 50歳

大抵にて老死

白河の関こえんと

白河の関 二二からみちの
勿来の関 ? 福島県

念珠の関 山形県

(白河下関)

三里に灸すうる

膝の関節の8と10cmほど下

膝から指三本分下外の字み処

→灸をする

健脚になる

元気がもと元気がになる
胃腸の働きが良くなる

杉風が別墅

採茶庵

杉山杉園

出立 ← 延宝8 1680 冬 芭蕉庵

翌年に李下から芭蕉を贈る 庵号に
天和2 1682 俳号を芭蕉と自称

懐紙 二つ折りに
よ青まきつける

五七五の初句表句

初折

二折

三折

名残折

面八句

表八句

芭蕉の独吟

連歌

8

百句を

連句

6

連句を

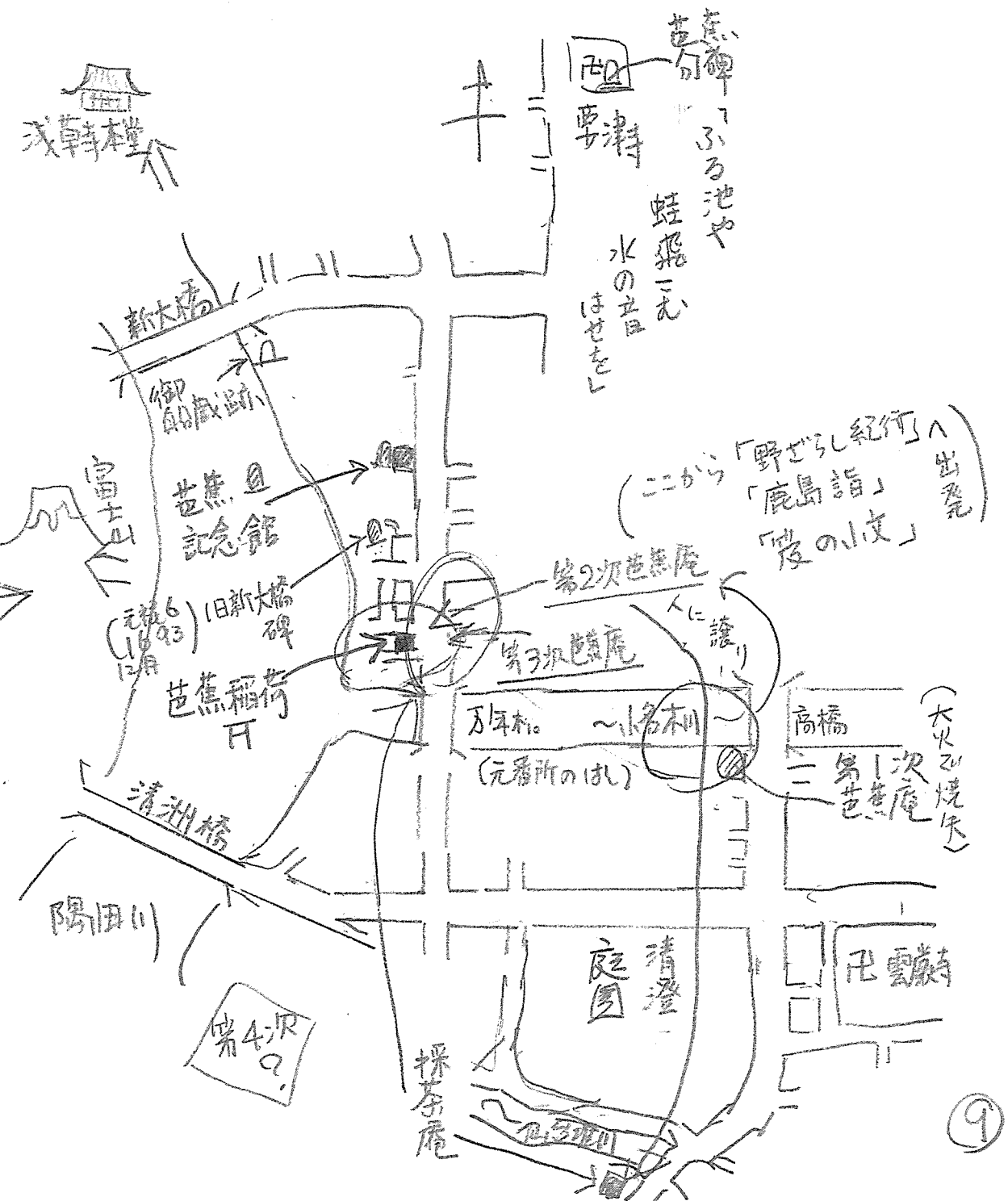
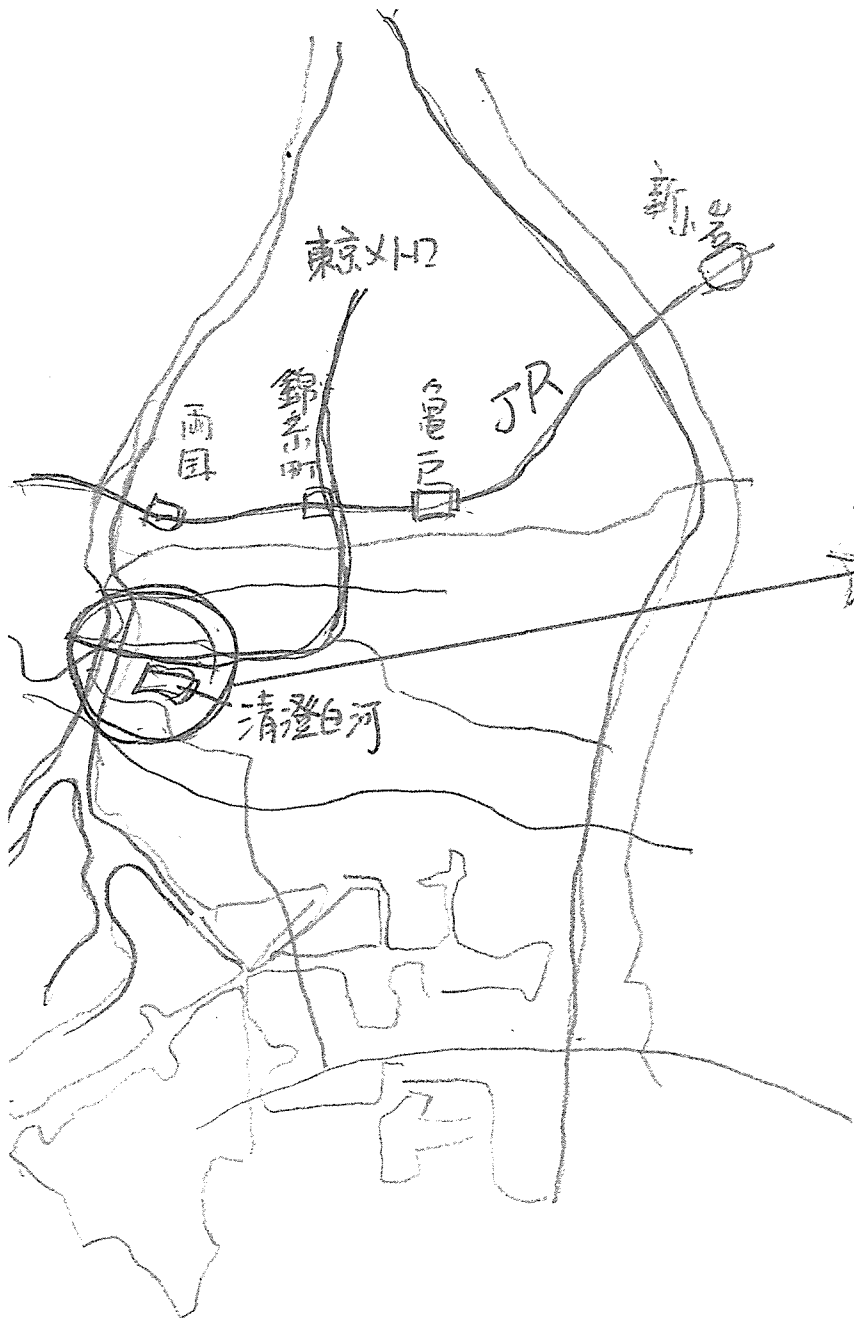
百韻

6

三十一句の
を連句にする

歌仙

8 14 14 14 14 14 14



浅草本堂

西
 要津
 水の立目
 はせをし
 蛙飛べ
 なる池や

(二から) 「野ざらし紀行」へ
 「鹿島詣」
 「霞の文」 出発

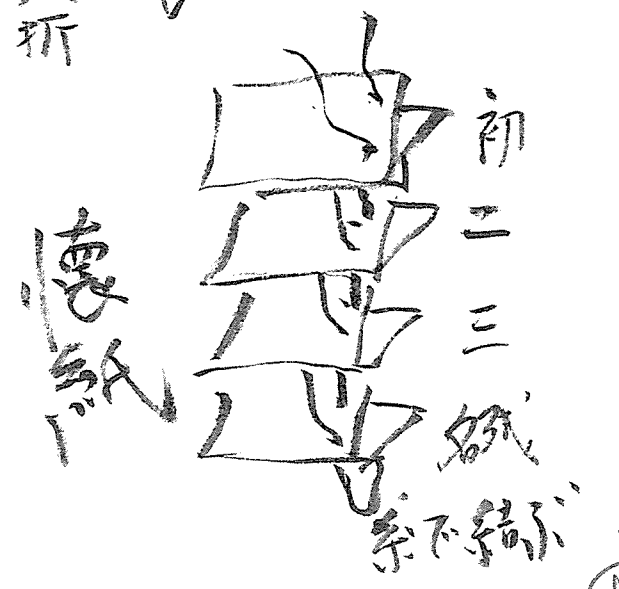
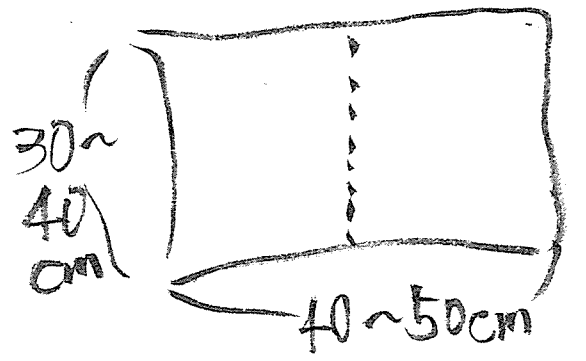
第2次芭蕉庵
 第3次芭蕉庵
 人に護り

万本村 ~ 小名木
 (元番所のはら)

高橋
 第1次芭蕉庵
 (大火の焼失)

探茶庵
 清澄庭園
 巴雲巖寺

第4次



④ 二枚の懐紙を二つ折にして重ねる

折紙に使う 風景、人ま出合、恋、動物

もみぢ、栗、雑、等

むすねんがき

人ま出合、もみぢ、栗、雑、等

かつらぎ

節の家

お母さん

芭蕉直蹟心筆

鮎の子のしらぬ送る 別裁

昔の戸も住かへる世や 雛の家



「 旧芭蕉庵跡 」
現 芭蕉稲荷神社



「 ミニ芭蕉庵 」？



隅田川を望む芭蕉→



「 採茶庵 跡 」 正面



「 旧新大橋 跡 」



「 採茶庵 跡 」 左から